

台湾における年少者日本語学習者の第二言語習得

—台湾の二つの日本語教育施設における幼児の日本語による対話・応答に関する考察—

外間 郁江*

1. はじめに

近年の台湾における幼稚園では、他との差別化から英語の学習に飽き足らず日本語や日本文化を異文化教育の一環として教えようとする積極的な教育施設が少しずつ見られている。子供たちに日本語を学ばせたいと考える父兄も多く見受けられる。しかし、現在幼稚園などの日本語を教える施設は英語を教える施設のように多くはないし、台湾での年少者の日本語学習に対しての研究は、大学生や高校生の研究に比べて決して多いとは言えない。それゆえ、実際に年少者がどのような環境で日本語を勉強し、彼らに対してどのような教育が行われているか詳細があまり見えてこない。

しかし台湾における年少者に対する日本語教育について調べるうちに、台湾人を対象とした2つの台湾の日本語教育施設があることを知り、2つの教育施設に赴いた。どちらの施設においても台湾人を両親にもつ幼児たちが日本語を使って生き生きとコミュニケーションをしている様子が垣間見られた。この子供たちが学ぶ教育施設にはどのような学習環境があり、またどのような家庭環境が背景にあるのか、同様にそのような環境の下で子供たちは既習の日本語を使い、どのように授業中コミュニケーションをとっているのだろうか。

年少者に対する外国語教育を考察する上で、母語のみで言葉を学ぶモノリンガルの子供たちと言語の発達上、発話の機能に違いが現れるのかとい

うことに興味を持ち始めた。これらを踏まえて、台湾での年少者に対して行われている日本語教育を明らかにし、今回の調査で最も多かった対話機能に焦点を当てその第二言語習得及びプロセスを考察していきたい。

2. 先行研究

葉 (1996)¹ は、台湾でもあまり例を見ない幼児の日本語バイリンガル教育をあげ、その全容を紹介している。英語で成功しているバイリンガル幼稚園を参考に日本語と英語による二重イマージョンという珍しいイマージョン・プログラム²を採用している。論文では、当時の授業のカリキュラムなどを紹介している。

陳惠文 (2006) はその研究の中で、台湾島の支配者が変わることに見られた文化的な影響と日本統治時代と国民党支配以降を中心に、現在に至るまでの幼児教育について述べている。加えて今日、託児所で行われている日本の文化教育に関する豊富で具体的な指導例を数多く紹介している。

これらの2つの論文に共通しているのは、指導方法の実例と提案であるが、実際にその授業を通して、児童が学び得た成果については具体的に触れられていない。

陳怡 (2004)³ は、自身が幼児に対して行った第二言語習得としての具体的な授業の例とその成果を紹介している。幼児教育において、日本と台湾の幼児教育の違いや、対象の学習者の年齢的な違いなどを考慮に入れながらコースデザイン、シ

* 国立台湾大学院生

ラバスデザインを行い、実践例を挙げている。生徒らが授業を通して学んだ点をテストで確認し、具体的に日本語能力検定三級程度の語彙の習得状況を調査している。また、同様から学んだ単語をどれだけ記憶しているかというテストを行い、その習得状況の変化を調べている。

しかし、これも従来多くの研究にみられるような文法の正確さや、語彙の広がり、使用文型などのシステムとしての言語要素に焦点を当てたものである。授業中のインターアクションにおける発話行動などについては言及されていない。

荻野 (2004)⁴は、その研究で生徒たちの自発的な発話について調査し分析を行った。イマージョン・プログラムが第二言語習得の方法として登場する基礎にはコミュニケーション能力を重視するコミュニカティブアプローチ的な考えと、聴解に重きを置く自然習得理論があるため、言語活動を理解するとき、インターアクションの面から理解することが重要とした。目標としている言語の構造を習得する以前に、彼らは1単語や定型表現をどのような目的で使いながらクラスに参加しているかを教師の誘導に拠らない自発的な発話から取り上げて、機能面から分析している。ここでは、二つのクラスのそれぞれ異なる授業（日本語と科学）を調査分析した。その結果、生徒たちの発話は教師との「対話」が大きな割合を占めており、「対話」に含まれる「模倣」する機能がもっとも多く現れた。幼児の第一言語習得に於いても同様の行動が観察されるとしている。これらの実験は、オーストラリアに住む移民などを含めたイマージョン・プログラムに参加している幼児に対する調査であって、ほとんどが英語母語話者であった。

3. 調査の範囲と方法

バイリンガル教育を通して外国語を学ぶ上でもっとも重要なのは母語の能力であり、3～4歳

ごろには、母語で日常に支障のない程度の言葉が一応話せるようになり、5歳ごろには第二期語獲得期を迎え（海保2002）⁵、自分と他者を区別することができるようになる（内田1989）⁶。よって、本研究では調査対象年齢を日本語学習初期段階であり、第二言語習得過程が顕著にあらわれる3歳児に設定する。

3.1 調査対象

中島 (2000)⁷はバイリンガル教育の立場から「年少者の日本語教育」は、「母語・母文化が形成過程にある幼稚園児を対象とする日本語教育である」と定義している。本研究ではこの定義のもとに、日本語を学習する幼児を対象に日本語を学習する年少者学習者としてみていきたい。

今回は、台北市の2つの教育施設を対象とした。一つは「台北市私立菁英幼稚園」で、ここでは小班と呼ばれる3歳児のクラスを対象とした。聴解力として覚えた言葉を実際の状況に合わせて使用でき、日常生活に現れる言葉が理解できる力としている。また、会話力とは普段の生活の中でクラスメートと話し合うことができる力としている。台湾に一時的に滞在している日本人生徒もクラスの中に含まれているが、今回は第二言語習得を観察するため、日本語を外国語とする台湾人生徒を対象とする。

「台北市私立元氣兒童日語補習班」でも年齢ごとに班分けされており、こちらも3歳児を対象とした。外国語である日本語を教えるというよりも、むしろ日本語をテーマに子どもたちと楽しく時間を過ごすという事に重点が置かれている。しかし、一日を通して行われる授業は日本語の指示によるものであるが、最初は全く日本語を理解できない幼児でも3、4か月から半年で聞いてわかるようになり、自ら発話できるようになる。クラスの中には、日本人生徒も在籍している。

3.2 調査方法

本研究は、台北市にある2つの教育施設に於いて日本語を学習する年少者を取り巻く環境と授業

中に見られた発話行動について、授業風景をビデオ撮影する訪問調査を行い、そのビデオを元に授業での会話を書き起こし分析した。

二つの施設で日本語を学ぶ生徒たちの日本語学習に関する全般を把握し、その結果を分析し、台湾の2つの施設との比較を試みたのである。国外で日本語を外国語として同じようにバイリンガル教育のもとに学ぶ生徒たちとの間にどのような違いが現れるかを比較する。これらを踏まえ最終的に結論を導き出し、建言を提出したい。

3.3 調査結果

3.3.1 対話

今回の調査で最も多い発話数が確認できた機能であり、二つの教育施設ともにステートメント⁸の発話機能とほぼ並んでいる。イマージョン方式であれ、第二外国語習得であれ、最初は教師の言葉の模倣を繰り返して言葉を覚える。当然目標言語を学ぶ過程において、発話機能の部分から見ればこの対話機能が多くなる。そして、言葉を覚え、表現を覚えることで発話の機会は、他の発話機能へと教室で使われる言葉の数と共に変化していくことになる。全体の流れとして対話的機能からステートメント面の機能発話へと言葉が拡大することの現れであるようにみられる。荻野(2004)⁹の調査にも、授業の初期に行われた調査時には対話の割合が大きいが、次第にステートメントの機能を持つ発話へと移行していることが分かっている。荻野(2004)¹⁰の調査で対話機能の中でも多かったとされる模倣は、今回調査したどちらの教育施設でも多く、応答、質問の順でその数の大半が占められていた。初期に日本語を学ぶにあたり模倣が増え、次いで質問に対する自発的な応答や、または教師に対する質問が現れるようになってきている。

3.3.1.1 模倣

模倣は今回の調査で多く観察された。以下例12の「台北市私立菁英幼稚園」の授業中に使われたレリアアの説明を行っていた時に、ホットドッグ

があり、この名前を練習した後に模倣が見られた。

例1：模倣（台北市私立菁英幼稚園：「ホットドッグ」を模倣、※「T」は教師、「S」は学生。「SA」は学生全員。）

- 1 S：あれはなに？
- 2 T：これはホットドッグ。
- 3 SA：ホットドッグ。
- 4 S：ドッグ？
- 5 S：いぬ？

4の発話では、「ドッグ」と言い直しをしている。ここから別の生徒が、犬と関連付けてさらに会話が開かれた。

例2：模倣（台北市私立元氣兒童日語補習班：「どんな気持ち」という模倣、「まあちゃん」¹¹の絵本の読み聞かせ。※「S1」は学生1、「S2」は学生2と続く。）

- 1 T：久しぶりに会えて、お母さんがお買い物ものにながーい時間行っていたの。久しぶりに会えた犬は、どんな気持ちだと思う？
- 2 S1：何も言わない。
- 3 S2：どんな気持ち……。
- 4 S3：どんな気持ち……（か）な？
- 5 S4：どんな***

5ははっきり聞き取れなかったのだが、「どんな***」という部分で教師が繰り返し質問していた「どんな気持ち」という言葉を自ら言おうと練習していたようであった。

日本語学習の初期段階では、このように模倣が全体的に多く、特に先生から生徒へ問いかけた際、先生の質問を繰り返すという事が多かった。また、例1のように先生の発した新しい単語に対して繰り返し、恐らく既習済みであろう英語の単語と関連付けて発話し、質問する生徒も見られた。荻野(2004)¹²の調査では、日本語の学習が進むにつれ

てこの模倣の回数が減ってくると報告している。

3.3.1.2 応答

対話の機能発話中、「模倣」に引き続き観察されたのが、この「応答」であった。教師が自分ではない他の生徒に質問したことに反応して自発的応答を示す場合である。この年齢になると、対人関係の広がりや深まりのなかで自分はみんなと一緒にいるときどうするか、他人はどう評価するかを推測し日常の行動や感情を想起したり推論して、総合的に判断することができるようになってくる(内田、2003)¹³ため、盛んに発話する機会を使って自身の自立性を確認しているように見られた。

例3：応答（台北市私立菁英幼稚園：別の生徒への注意に反応して）

1 T：S1急げ急げ

2 S2：あたしまだだよ。S1がいたから。

例3において本来はS1に急ぐように教師は指示をしているが、横で聞いていた生徒が教師に自分の事情を話している。教師に自分もS1と同じように注意されないためにあらかじめ答えたように考えられる。このS2の発話行動は内田(2003)¹⁴が述べる、モニターする自分と分化し始めたことを表している。

例4：応答（台北市私立元氣兒童日語補習班：教師の説明に同意して）

1 T：そう、本当のお母さんは、こっち。まあちゃん、なに悪いことばかりしているのって怒ってるの。

2 S：そうだよ。

例4では、絵本のお話のなかに出てくる一場面を教師が全員に説明を行った際に、生徒の一人が同意するように応答した。この発話の前に、数人が絵本のイラストを指して、2人出てくる「まあちゃん」¹⁵の母親を示している。どちらが本物の母親なのかを話し合い、ここで教師はどちらが本物であったかを明かしている。これに同調する形で発話された。話を聞いている自分自身と、この

場合はそのストーリーを対象として、モニターした結果であると考えられる。

例3の「台北市私立菁英幼稚園」では、これ以外の発話に教師に対してではなく、他の生徒の意見に対して応答しているものもいくつか見られた。教師との間だけでなく、他の生徒たちとも日本語でコミュニケーションを図っていることが観察された。また、応答の機能発話で、「台北市私立元氣兒童日語補習班」での発話の約半数にあたる7回が中国語による発話であった。

3.3.1.3 質問

今回の調査で見られた質問は全般的にわからない語彙の意味を確認するものが多かったが、それ以外に関する質問も見られた。ものの名前を聞く質問や、それ以外にも言葉の意味を知ろうとする質問も見られた。

例5：質問（台北市私立菁英幼稚園：言葉の意味の確認）

1 T：あと一人、よし。今度はちょっとお金を変えよう。この中で一番安いのはどれかね。

2 S：「やすい」は何なの？

台北市私立菁英幼稚園で見られた質問のなかに、例5のように言葉の意味を確認する質問や、動作に関する理由を聞く質問も見られた。今回見られた質問は大久保(1997)¹⁶が示すような、眼前のものに関する質問ばかりではなく、内容的な質問が多く見られたようであった。

例6：質問（台北市私立元氣兒童日語補習班：タヌキの動向を聞く）

1 T：タヌキが一匹、大慌てで逃げて行きました。

2 S：そのタヌキ、なんで。

※Tは絵本の犬が逃げていくタヌキを追いかけているイラストを指し示す。

例6では、教師が朗読した絵本に出てくるタヌキがする行動に関して生徒が質問をしている。この質問も大久保（1997）¹⁷が示すようなこの年齢特有の質問の仕方、より内容的な質問をしていることがうかがえた。

両教育施設で記録された質問では、当然具体的に教師が話すものの名称の意味を確認する質問も見られたが、このような表面的な質問ばかりではなく、言葉の深い意味合いについての質問がなされているが、必ずしも答えが教師から得られるとは限らないようであった。また、「台北市私立元氣兒童日語補習班」での記録から確認できた質問のうち6回は中国語であったが、こちらの質問も物語の内容を確認する質問が多かった。

3.4 調査分析

2つの施設で学ぶ子供たちの発話の量に違いはあったが、機能面に関しては互いに類似している部分も見られ、今回参考にした荻野（2004）¹⁸とも近いことばの発達の傾向が見られた。今回の調査分析を以下の三点にまとめた。

- ① 今回調査した児童たちは、文法的な間違いはみられるものの、同程度の年齢の幼児が自然にする発話に近いことばを、外国語である日本語で行うことができているようであった。当然個人差は見られたが、一人ひとりの生徒が自分の母語のようにすでに学んだ日本語を使ってコミュニケーションを図っている様子を観察することができた。
- ② 「台北市私立菁英幼稚園」と「台北市私立元氣兒童日語補習班」ではコースデザインやシラバス、教育に対する理念からも違いが多く見られた。しかし、実際に現場に立つ教師が生徒たちに接する際には比較的近い授業のスタイルが見られた。中心となる教師もアシスタントに当たる教師もすべて目標言語である日本語を授業中に使って子どもたちに接している点、さらに授業では生徒たちを飽きさせないためにさまざまな工夫がされ、身体を動かす遊びや歌、絵本

の読み聞かせが行われ、子どもたちは積極的に授業に参加していた点である。H・カーテン（1999）¹⁹が子どもたちの授業を行う際のストラテジーとして「教師はコンテクストの手がかり、例えば、ジェスチャー、顔の表情、ボディランゲージ、あるいは具体的に示せるもの—小道具、各種の実物教材、視覚教材（とくに入門期の生徒の場合）—などを絶えず使っていく」としている。図らずしも教師たちの工夫が自然とこのような行動に現れたと言えるだろう。

- ③ 幼児たちの授業中に見られた発話に、年相応の発話行動が多く見られた。今回調査の対象になった2つの施設に特徴的であったことは、ともに授業のインターアクションに対して非常に積極的であり、また他のクラスメートたちと協力しながら授業が進められていた反面、ピアジェ（1963）²⁰がこの年齢の子どもたちに見られるとした自己中心的な行動も発話の機能を調べる過程で明らかになった。

また、発話の機能に現れた数字を荻野の先行研究（2004）²¹と比較したときに、荻野の調査で現れた「対話」に含まれる「模倣」は日本語を学び始めた初期の段階ではどちらの施設の生徒にも現れたが、一部の生徒には「模倣」が観察されないこともあった。これは、荻野（2004）²²の日本語の学習が進むにつれて模倣の回数が減ってきていることから考えられた。台湾人家庭で育てられたにも関わらず、家庭内ですでに日本語での生活が基盤となっていた生徒も少なからず存在していたからだと推測される。その生徒たちは、「ステートメント」と他の「対話」の機能を中心に発話する回数が増加傾向だった。これは、荻野（2004）が紹介しているMcShane（1989）²³の言語システムの発達を促すのは「ステートメント」の発話だという理論を支持するとともに、荻野（2004）²⁴の実証と同じ傾向が見られ、今回調査の対象となった台湾人の幼児たちも欧米各国で学ぶ子供たちと環境に違いはあるものの、結果に違いは見られず

同じような普遍的な言葉の発達があるように考察できる。

4. まとめと今後の課題

今回の調査で年少者の自発的な発話機能から、台湾人の第二言語習得過程の一端を垣間見ることができた。「台北市私立菁英幼稚園」と「台北市私立元氣兒童日本語補習班」の各機関において、記録を行ったクラスの生徒たちは今までに学んだ日本語を使い、多様性に富んだ表現方法を用いて、各機能的な発話を行っていることがわかった。「台北市私立菁英幼稚園」のように、すでにどちらの言語でも教えられるアシスタントがいる環境で、双方向に日本語、中国語を上手に切り替えながら子どもたちに教えることができ、言語を中心に台湾に住む日本人幼児と台湾人幼児たちの互いの異文化理解にも繋がっていた。また同時に、通常の母語で成長する同年齢程度の子どものみで見られるような、認知的な発話行動も多く確認された。今回の調査では自発的な発話が多かった日本語の授業のみを記録し分析を行ったが、今後は日本語の授業及び日本語の時間を通して獲得した日本語の能力を身につけ、他の授業に参加した際にどのような発話機能を駆使して授業に参加するのか詳しく調査が必要であろうと考えられるし、「対話」から見られる「模倣」、「応答」、「質問」以外の機能である、聞き手に対して何らかの行動を促す機能を有する発話である「行動喚起」、「依頼」なども考察していきたい。

(参考文献)

- 葉淑雯 (1996) 「台湾における幼児向けの日本語教育についての一考察—満3才児～6才児を中心に」 東呉大学
- 陳怡 (2004) 「幼児/児童を対象とした日本語教育に関する研究—台湾における15名の授業を例として」 国立高雄第一科技大学
- 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン教室

での自発的な発話—機能的側面の調査—」『日本語教育』122号

- 海保博之・柏崎秀子 (2002) 「日本語教育のための心理学」 新曜社
- 内田伸子 (2003) 「幼児心理学への招待—子どもの世界作り」 株式会社サイエンス
- 中島和子 (2000) 「カナダ日本語教育振興会OBCプロジェクト2000」
- 大久保愛 (1997) 「幼児のことばとおとな新版」 三省堂
- H.カーテン/C.A.B.ベソーラ (1999) 「児童外国語教育ハンドブック」 大修館
- ピアジェ J. 大伴茂 (訳) (1963) 「児童の自己中心性」 同文書院
- McShane.j. (1980) Learning to Talk. Cambridge: Cambridge University Press
- (絵本)
- たかどのほうこ (2003) 「まあちゃんのまほう」 福音館書店

注

- 1 葉淑雯 (1996) 「台湾における幼児向けの日本語教育についての一考察—満3才児～6才児を中心に」 東呉大学
- 2 イマージョン・プログラムとは、カナダで開発されたバイリンガルの育成を目指したプログラムである。学校教育を通して目標言語の環境を教室に任意に作り、そこに全くその言語の学習経験がない生徒を入れて目標言語を使って教科学習を進める方法である。
- 3 陳怡 (2004) 「幼児/児童を対象とした日本語教育に関する研究—台湾における15名の授業を例として」 国立高雄第一科技大学
- 4 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン教室での自発的な発話—機能的側面の調査—」『日本語教育』122号
- 5 海保博之・柏崎秀子 (2002) 「日本語教育のための心理学」 新曜社
- 6 内田伸子 (2003) 「幼児心理学への招待—子どもの世界作り」 株式会社サイエンス
- 7 中島和子 (2000) 「カナダ日本語教育振興会OBCプロジェクト2000」
- 8 人や事物について「名前」を言ったり、「描写（事物の性質や事象の説明など）」をしたり、その場を超えた事柄に関する「情報」を提供したりする発話。その場を超えた事柄という部分は、授業が行われている内容にとらわれずに、関連する情報を提示するものである。

- 9 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン
教室での自発的発話—機能的側面の調査—」『日本
語教育』122号
- 10 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン
教室での自発的発話—機能的側面の調査—」『日本
語教育』122号
- 11 たかどのほうこ (2003) 「まあちゃんのまほう」
福音館書店
- 12 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン
教室での自発的発話—機能的側面の調査—」『日本
語教育』122号
- 13 内田伸子 (2003) 「幼児心理学への招待 子ども
の世界作り」株式会社サイエンス
- 14 内田伸子 (2003) 「幼児心理学への招待 子ども
の世界作り」株式会社サイエンス
- 15 たかどのほうこ (2003) 「まあちゃんのまほう」
福音館書店
- 16 大久保愛 (1997) 「幼児のことばとおとな新版」
三省堂
- 17 大久保愛 (1997) 「幼児のことばとおとな新版」
三省堂
- 18 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン
教室での自発的発話—機能的側面の調査—」『日本
語教育』122号
- 19 H.カーテン／C.A.B.ベソーラ (1999) 「児童外国
語教育ハンドブック」大修館
- 20 ピアジェ J. 大伴茂 (訳) (1963) 「児童の自己
中心性」同文書院
- 21 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン
教室での自発的発話—機能的側面の調査—」『日本
語教育』122号
- 22 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン
教室での自発的発話—機能的側面の調査—」『日本
語教育』122号
- 23 McShane.j.(1980) Learning to Talk. Cambridge:
Cambridge University Press
- 24 荻野祥子 (2004) 「年少者の日本語イマージョン
教室での自発的発話—機能的側面の調査—」『日本
語教育』122号